

【研究ノート】

レオニート・チシコフの共生のユートピア —— 「僕の月」、幻想的生物、未来派の夢

Leonid Tishkov's Symbiotic Utopia :

Private Moon, Fantastic Creatures and Homage to Russian Futurists

鴻野わか菜

KONO Wakana

要旨 ロシア現代美術を代表する作家の一人であり、アーティスト、パフォーマー、詩人、小説家、脚本家、絵本作家、出版家、キュレーターとして多彩な活動を続けるレオニート・チシコフ（Леонид Тишков 1953年生）の作品を解説する。チシコフの創作世界の特徴を、共生のユートピア、「新しい世界」の創出、美術と文学の融合、世界文化への関心という観点から分析する。

レオニート・チシコフ略歴

レオニート・チシコフは、1953年5月4日、ウラル山脈の小村ニージニー・セルギーで生まれた。鉄鋼工場を中心に栄えた古い村で、チシコフは、小山の麓の大きな人造湖のほとりに立つ丸太小屋で幼少期を過ごした。両親は教師で、家には本が溢れていた。幼いチシコフは、10巻本の黄色い背表紙の児童百科事典に夢中になり、世界のあらゆる事象についての記事を読み耽った。雑誌『知識は力なり』や『若者のテクノロジー』に掲載されていた幻想小説も愉しみの一つだったという。



「僕の月」モスクワ

チシコフは、自伝の中で、幼少期の日々を次のように回想している。

周囲の世界は、珍妙さ、神秘性、そして美によって、私を驚嘆させた。クカン山の頂上に座って、山をとりかこむ湖を眺めていると、山上に浮かんでいる大きな雲が湖面に映っているのが見えた。湖のまんなかには、種のからっぽの殻のような小舟が浮かんでいて、釣り人が糸を垂れていた……¹⁾

自然界に一人で向き合い、周囲の世界に神秘と詩情を見出すことを覚え、書物を通じて世界、人体の不思議や文学作品に没頭したこと——こうした幼少期の体験が、チシコフの創作世界の源泉となった。

村には美術館はなかったが、ソ連でもっともポピュラーだった総合誌『アガニョーク（灯

¹⁾ Леонид Тишков, Как стать гениальным художником не имея ни капли таланта. Издание второе, дополненное. М.: ОГИ, 2013. С.13.

火)』で、レヴィタン、スーリコフ、レーピンなどのロシア名画や、ラファエロ、ルーベンスを知り、兄がモスクワから持ち帰った雑誌『アメリカ』で、マーク・ロスコをはじめとする現代美術に出会い、衝撃を受けた。チシコフは幼い頃から好んで絵を描いたが、村の絵画教室でひたすら石膏像の模写を強いられたことに意味を見出せず、すぐには美術の道は歩みださず、高校卒業後はモスクワのセーチェノフ医科大学に通った。

在学中にイラストや風刺画で人気を得て、ユーゴスラヴィアの国際風刺画コンテストで金賞を受賞し、画家になることを決意。上京して医師の修行を積んだ後、風刺作家として出発したというチシコフの半生は、どこかチェーホフを彷彿させる。1979年に大学を卒業した後は、ポーランド、イタリア、ベルギー、ドイツなどの国際風刺画展や視覚詩（ヴィジュアル・ポエトリー）展で次々に作品を発表した。1991年には、モスクワのアライアンス・ギャラリーで初の個展「ダブロイドだけではない」を開催、1993年には、デューク美術館で個展「生物たち」を開催し、空想上の奇妙な生物を主題とするアーティスト・ブックやイラストを発表した。挿画家としても旺盛に活躍し、妻で著名な児童文学作家であるタチヤナ・マスクヴィナーの童話をはじめ、詩人ダニイル・ハルムス、ミハイル・スホーチン、児童文学作家セルゲイ・セドフらの作品を空想的な挿絵で彩っている。

2003年に、モスクワ近郊クリャジマの野外芸術祭「アート・クリャジマ」で、光る月のインスタレーションを制作して以来、月のオブジェを携えて世界各国を旅する「僕の月」プロジェクトを展開している。2012年には、初の絵本『お月さまとおとこのこのお話』を刊行した（モスクワ、オギ出版社：2014年9月徳間書店より邦訳出版予定）。

日本とのかかわりも深く、モスクヴィナーと共に日本を旅行した際には、鎌倉の大仏や京都の寺院に自作を設置して撮影を行い、帰国後は、モスクヴィナーがテキストを、チシコフが挿画を担当した日本旅行記『枕草子』を出版した（2002年、モスクワ、レトロ社）。「メッセージ展——モスクワのアーティストからあなたへ」（2006年、富山県南砺市、福野文化創造センター）、堂島リバービエンナーレ（2009年）にも参加。中房総国際芸術祭いちばらアート×ミックス（2014年3月21日－5月11日）では、来日して、廃校を舞台に月の新作インスタレーションを展示する。

空想上の生物たち

チシコフの初期作品の中心的なテーマは、空想上の奇妙な動物である。人間の姿をしているが、象の鼻の中に入りこんで頭だけ外に出して生活する者たちを描いた連作ドローイング「ジヴフ（象の鼻のなかの生物）」（1989年）。人間の足の形をした生物の絵物語「ダブロイドたち」（1991年、書籍出版）。木の切れ端に足が生えた生物が、人間の少女と心を通わせる物語を絵本のように描いた「チュルカ」（1995年）…… チシコフは自分が作り



絵本『お月さまとおとこのこのお話』



ジヴフ（象の鼻のなかの生物）



「ダブロイド」2011

だした空想生物の生態を、アーティスト・ブック、コミックス、オブジェ、戯曲などの多様なジャンルを駆使して、幻想的かつリアルに描きだしてきた²⁾。これらの作品は、時にグロテスクだが、哀愁に満ちたアナザーワールドを形作っている。

たとえば、潜水服を着た人間の形をした生物「ダイバー」がいる。チシコフは、善良で心優しい「ダイバー」の生活を、3巻の絵本でみずみずしいタッチで描きあげている³⁾。

ぼくが最初にダイバーを見たのは、湖の岸辺だった。彼らは水から上がってきたところだったが、ホースの先は湖の底までつづいていた。ダイバーたちの皮膚である黒いピロードのような潜水服は、ぬいぐるみのクマに似ていて、長いホースはへその緒を思わせた。このはてしないへその緒は、一生ぼくたちにくっついたまま、大地と永遠とを結びつけている。重い靴をはいて、ゆっくり歩くダイバーたちは、人間そっくりだった。ダイバーたちは、ぼくたち自身である。じつのところ、ぼくたちの体だって、潜水服のような入れ物にすぎない。なかにどんな生き物がいるのか、誰も知らない。この入れ物のなかには、ひよっとしたら、黒いからっぽの空間か、まぶしい光があるのだろうか？ それとも、新しい可能性に満ちたファンタジーの世界があるのか。そこでは翼を持たずに空を飛んだり、大海に潜るように自分の深みに沈んでいけるのかもしれない。

ぼくは彼らに手をさしだして、岸にあがってくるのを手助けした。

²⁾ チシコフの幻想生物については、以下の文献が詳しい。鈴木正美「レオニード・チシコフ」北海道大学スラブ研究センター 現代ロシア文学REFERENCE GUIDE-ON-LINE <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/literature/tishkov.html>

³⁾ Леонид Тишков, Водолазы 1.2.3. М.: Гаятри, 2005. 拙稿での引用は本書から行った。

『ダイバーたち』1巻、第1話

最初のエピソードで語られているように、「ダイバー」とは、「ぼくたち自身」であるという。「実は、これはぼく自身の話である。もし眼球をじっと見たら、それがダイバーのヘルメットによく似ていることに気づくだろう。ひょっとしたら、ぼくたちは、ぼくたちのなかに住んでいる二人の小さなダイバーによって、周囲の世界を見ているのではないだろうか」とも書かれる。高潔で家族愛に溢れ、時に愚かで、献身的なあまり自滅することもあるダイバーたちの生態を、いくつもの短編小説とイラストで描きだす幻想的な本書が、間接的に浮かびあがらせるのは、人間自身の情と業である。



「ダイバーたち」

ダイバーが高貴な存在であることは疑いようがない。だからダイバーはバラを救わずにはいられない。短い夏のあいだに奇跡のように一輪だけ咲いたバラなのだから！でも、自分の残りの酸素をすべてバラに与えて、ダイバー自身が窒息死してしまうのは正しいのだろうか？バラは、本当は酸素など必要としていないというのに。他の植物と同じように、バラに必要なのは二酸化炭素であり、酸素はバラを殺してしまう。善行を施す前に、それが何をもたらすか考えよう。ダイバーたちの世界では、自己犠牲は命取りとなる。

『ダイバーたち』1巻、第9話

家族はいつも和を求める。ダイビングをしたがる者は、自分の身近な人も100パーセント同じ願いを抱いていると考えがちだ。でも、どんなに身近な人も、あなたの鏡像ではない。一番親しい人も、あなたとは違う存在だ。だから、自分の子どもの手をとって、家族みんなで仲良く水に潜ろうとするのは良くない。ダイバーたちは法には従順な生き物なのに、子供への愛ときたら狂気と紙一重である。

『ダイバーたち』1巻、第33話

だが、愛や思いこみのあまり愚行を重ねる「ダイバーたち」は、他者との魂の交流を求め、世界の美と神秘を享受しながら有限の生を生きる、寛容で調和的な存在でもある。

ダイバーたちにとって、世界とは、人生を共にする水槽のことである。輝く透明な水の入った水槽を持っている者もいれば、濁った水、緑色の水、バラ色の水の入った水槽を持っている者もいる。あるダイバーたちの水槽には小さな魚が泳いでいるし、サメがいることもある。天国のように美しい魚がいる水槽もある。そんなことはあまりないけれど。

『ダイバーたち』1巻、第2話

ダイバーが死ぬ時、輝く魂の鳥がダイバーのもとから飛び去ってゆく。少女が、からっぽになった潜水服を抱きしめて、ダイバーと別れを惜んでいる。ダイバーはあたたかくて、生きているようだ。ダイバーは、子どものころ好きになって、一生忘れないで愛しつづけるクマのぬいぐるみに似ている。だから、ダイバーは死んでしまっても、ずっと生きつづける。

『ダイバーたち』 3巻、76頁



「ダイバーたち」

ダイバーたちはヘルメットの中の空間に、「星空や日の出、オレンジ色の空焼け、秋の落葉」(1巻、第3話)を抱いているのだという。このロマンチズムと寂寥感、ユートピア的な世界観は、チシコフの他作品にも通底している。

未来派の夢

チシコフは、「美術とは詩の昇華である」とであると語る。詩(ポエジヤ)とは、チシコフにおいて、見慣れた日常の光景のなかに美や宇宙を見出し、ユートピアを現出させることである。

2007年に個展「ラドミール——ユートピアのオブジェ」(モスクワ、クローキン・ギャラリー)でチシコフが創出したのは、マカロニやパンを組み合わせて作ったユートピアの



「ラドミール——ユートピアのオブジェ」



「永遠のキューブ」



「ラドミール——ユートピアのオブジェ」

光景だった。ありふれた食材を使ったのは、日常的な物に詩情を見出す意思表示であるという⁴⁾。

「ラドミール」は、ロシア未来派の詩人ヴェリミール・フレブニコフが夢見た世界の未来像だった。チシコフは、ユートピアのヴィジョンを追い求める途上で37歳で亡くなった詩人へのオマージュとして、パンで作った317の人形“フレブニコフ”（「フレブ」はロシア語で「パン」の意）とマカロニの塔を構成した。

マカロニの塔は、ロシア・アヴァンギャルドの作家ウラジーミル・タトリンの「第三インターナショナル」、エル・リシツキーの「プロウン」やマレーヴィチの「アルヒテクトン」を模していて、マカロニの梯子は、祖先の復活を夢見た思想家ニコライ・フォードロフへのオマージュである⁵⁾。

「317人いるはずの地球の代表者の1番目が自分である」というフレブニコフの思想を踏襲したとチシコフは語るが、こうしたユートピアを魔法のように作り出すチシコフもまた、その317人のなかに入っているにちがいない。この作品には、ロシア的なユートピアの系譜、宇宙思想の伝統へのチシコフの共感と、その継承者としての自負を見てとることができる。

編み男「ヴァーザニク」

チシコフは、大勢の親戚とともに幼年時代を過ごした故郷ウラル地方に愛着を持ち続け、折にふれて、ノスタルジックな映像作品や、ウラルの工場でのインスタレーション設置によって、故郷との語らいをつづけている。なかでも、母親を中心とする祖先の古い衣服を用いた「ヴァーザニク（編み男）」（2002年）は、チシコフの故郷への思い、布や糸という日用的な素材への関心、作品を通じて人々と一体化するという思想が結実したプロジェクトである。

チシコフは、この作品の解説テキストに、1959年に従兄が結婚した際の親族写真を添えて、次のように書いている。

この写真に写っている人の多くは、もうこの世にはいない。彼らが着ていた衣服は、他の親戚に受け継がれた。そして、衣服がすっかり古くなると、布を裂いてリボンにして、絨毯を編んだ⁶⁾。

古い布を裂いてマットを編むのは、ウラルの伝統工芸であるが、チシコフはマットのかわりに等身大の編みぐるみを作り、祖先たちの衣服をまとめてパフォーマンスを行った。

⁴⁾ チシコフは、2012年には、角砂糖を積み重ねてマレーヴィチの「アルヒテクトン」を再現するインスタレーション「永遠のキューブ」も発表している（モスクワ、クローキン・ギャラリー）。

⁵⁾ 「ラドミール——ユートピアのオブジェ」については、以下の文献を参照。Leonid Tishkov. In Search of the Miraculous, 1980-2010. M.: Krokin Gallery, 2010. p.378-387. 本書は現時点でのチシコフについての最も詳しいアルバムである（英語、ロシア語）。

また、チシコフの作品情報は、作家本人のホームページ、および、クローキン・ギャラリーのサイトでも得ることができる。

レオニート・チシコフHP <http://leonid-tishkov.blogspot.jp/>

⁶⁾ Leonid Tishkov. In Search of the Miraculous, 1980-2010. p.252.



「ヴァーザニク (編み男)」



「ヴァーザニク (編み男)」

それは、「祖先の魂を取り戻すための魔術的な儀式」であり、「人々の魂を永遠のスパイラルに編みこむ」ことだという。

死者の魂を復活させ、再生させるという試みは、チシコフが「ラドミール」の解説文でも言及したニコライ・フョードロフの宇宙思想を彷彿とさせるものだが、チシコフの「編み男」は、ユーモアとあたたかさ（なにしろ編みぐるみなのだから!）に満ちている。

僕の月

2003年以降、チシコフが精力的に取り組んでいるのが、「僕の月」プロジェクトである。チシコフは、光る三日月のオブジェを友人のように抱えて、どこへでも出かけていく。モスクワ南部の自分のアトリエの屋上へ、パリへ、ワシントンへ、ニュージーランドへ。

月は、孤独な人々の「唯一の友」であり、「私の友でもある」とチシコフは語る。月を携えて20カ国近くを巡ってきたチシコフの旅は、国境や宗教を超えて、月という普遍的な美によって人々を結びつけようとする巡礼のようでもある。

チシコフは、台湾の展示では李白の詩を、エニセイ川の展示では地元の詩人ヴィクトル・アスターフィエフの小説『魚の王様』を引用し、作品を設置する文化圏との創造的な対話を重ねて、新しい物語を紡ぎだす。

2014年春の中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスでは、「松尾芭蕉の月」、「ジョルジョ・デ・キリコの月」、「ガルシア・ロルカの月」の3作品を、旧里見小学校に展示する予定である。芭蕉は、日本文学者ヴェーラ・マルコワらの翻訳によってソ連時代に人気を博したことから、チシコフもか



「僕の月」 ニュージーランド

ねがね愛読しており、今回の作品の源泉となっている芭蕉の句について、自伝でも言及している。

芸術家は、創作によって、ありふれた物のなかに潜む詩情を明らかにすることができる。普通の人にとって、普通のは普通には見えない。月を見れば「ああ、月だな」と思い、月が地面を照らしてくれるから、夜道が明るくて、転ばなくてすむと感じるに過ぎない。

でも、詩人なら、たとえば松尾芭蕉であれば、月を見れば詩が生まれる。

木を切りて 本口見るや 今日の日

私たちは、月だけでなく、りんご、コップ、デッサン用の石膏の鼻でさえ、本当はこんなふうに詩的に捉えることができるはずだ⁷⁾。

今回、芭蕉へのオマージュに加えて、スペインの作家、イタリアの画家へのオマージュをひとつの空間に展示するのは、とても興味深い試みである。チシコフは、「この3作品は、あわせて展示することが重要で、3作品で1つの総合的なインスタレーションになっている⁸⁾」と語っているが、この3作品の出会いは、まさに、様々な国や文化圏の交流、多様なジャンル（俳句、小説、美術）の融合を示唆している点で、国際現代美術のコンセプトを表現しているのみならず、チシコフ自身の世界観を表現しているからである。

チシコフの作品が、2013年3月に閉校した旧里見小学校に設置されるのも、チシコフの創作理念と呼応しつつ、豊かな連想を誘う。チシコフは、絵本、児童文学、子ども向けのワークショップなど、子どもと関わりの深い作家であり、自伝でも、子どものように世界と人生を受け入れることこそ創作の第一歩だと語っている。

創造する人間になるには、どうすればよいか。もしも、人生とは創造であり、あらゆる瞬間が創造のエネルギーで照らされていることを理解すれば、自分の才能を見出し、自分が天才であることに気づくだろう。なんでもできる気がしていた子どものころのように。子どもの時は、絵を描くのも、歌うことも、踊るのも、自分の世界を創ることも、なんでもできると感じたはずだ。そう、飛ぶことでさえ⁹⁾。

いちばらアート×ミックスのチシコフの部屋は、私たちの失われた子供時代に、そして、宇宙にもつながっている。「デ・キリコの月」について、チシコフは次のように書いている。

1960年代にジョルジョ・デ・キリコが描いた絵のなかに、私は共通の無意識を見い

⁷⁾ Леонид Тишков, Как стать гениальным художником не имея ни капли таланта. Издание второе, дополненное. С.24-25.

⁸⁾ 2013年12月19日、チシコフから筆者への私信より。

⁹⁾ Леонид Тишков, Как стать гениальным художником не имея ни капли таланта. Издание второе, дополненное. С.9.

だし、希望の光が燃えあがるのを感じました。これは、空間が私たちの世界と非在によって切り分けられた場所です。私たちの家のありふれた壁のむこうに、永遠の冷たい宇宙があり、その一部が姿をかえて、輝く月になっています。私たちの家を訪れた天の身体には、宇宙の深みから数百万の星のエネルギーが流れこんでいます。そして私たちは、そのそばに、永遠の端に達、この光の一部になるのです。



「デ・キリコの月」

チシコフにとって、月は、国境や時代を越えて人々を結びつけるだけではなく、地球を超えて人々を宇宙的なユートピアへと誘う存在なのである¹⁰⁾。

ロシア現代美術におけるチシコフの位置づけ

こうしたチシコフの創作は、ロシア現代美術、そして世界のアートシーンにおいて、どのような位置にあり、どのような役割を担っているのか。

1991年12月のソ連邦崩壊は、政治、経済、文化のシステムに大きな変化をもたらした。政府の検閲と同時に庇護も失ったロシア現代アートは、資本主義の導入によって急速に商業化され、作家は観客と資金をいかに獲得するかという新たな問題に直面することになった。国内では、ポップカルチャーや消費社会の娯楽をライバルとするサバイバルを強いられ、国外では、ビエンナーレやアートフェアでの「戦い」の渦中に投げだされ、90年代のロシア現代アートは、一気に過激化、戦闘化し、皮肉な色彩を強めていった。

ウラジーミル・ドゥボサルスキー（1964年生）&アレクサンドル・ヴィノグラードフ（1963年生）は、ロシアの美男美女の乱交を大画布に色鮮やかに描きあげ、社会主義リアリズムにかわる「新しい壁画」を制作し、新生ロシアの享楽を写しとった。アレク・クリーク（1961年生）は、裸体に首輪をつけて咆哮する犬人間のパフォーマンスで、現代ロシアの弱肉強食、人間の欲望をストレートに表現した。「遅れてきたフェミニズム」に夢中になった女性作家たちは、「鑑賞される女性」という役割からの脱却をめざして、因習的な女性像と戦った。国際モスクワ現代美術ビエンナーレ、「アート・クリャジマ」（モスクワ近郊クリャジマにおける野外芸術祭）、若手作家のフェスティバル「止まれ！ そこに行くのは誰だ？」などの美術祭は、ソ連、ロシア正教、消費社会、グローバリズムを揶揄する挑発的な作品で溢れた。

しかし、ともすればアンチユートピア一色で塗りつぶされがちなロシア現代美術界にありながら、ユートピア的なムーヴメントを作りだしている作家たちがいる。航海をテーマ

¹⁰⁾ チシコフの月の旅は、美しい書籍にもなっている。2005年に出版された『僕の月』は、月のインスタレーションを野外や屋内で撮影した叙情的な写真に、チシコフが詩を寄せた、大人のための写真絵本である。Leonid Tishkov, Boris Bendikov, Частная луна. М.: типография Линия График, 2005.

2012年に出版したチシコフ初の絵本『お月さまとおとこのこのお話』は、大雨のせいで風邪をひいた月を、孤独な男の子が自宅に連れ帰って介抱し、恢復した月を見あげて幸せな思いに満たされるという、珠玉のような作品である。Leonid Tishkov, Мальчик и луна. М.: ОГИ, 2012.

にインスタレーションやパフォーマンスを行い、自然と人間の調和を探求するアレクサンドル・ポノマリョフ（1957年生）。古代文明に関心を持ち、飛翔や天使というモチーフを通じて、死の浄化、心理的な自由を表現するタチヤナ・バダニナ（1955年生）。ロシア構成主義の現代的な展開を試みる一方で、国内外で芸術家グループのアーティスト・イン・レジデンスを組織して、異文化との創造的な接触を追求するウラジーミル・ナセトキン（1954年生）。そして、レオニート・チシコフも、このムーヴメントの代表的なアーティストだといえる。

チシコフの世界観はユートピア的であり、周囲のありふれた世界に詩を見出そうとする。月が誰をも分け隔てなく照らすように、文化や民族の多様性、自然界、人間界を包みこむ調和的な世界を創りだそうとしている。

チシコフは語る。

アーティストは、ありとあらゆる道具を使って新しい世界を次々に創りだす。アーティストの魔法の杖は、筆、キャンバス、紙、鉛筆、インスタレーション、ビデオ、オブジェ、彫刻である¹¹⁾。

新しい世界を創りだすこと、あるいは、ありふれた世界を新しいまなざしで眺め、そこに詩、美、救いを見出すこと——それは、ドストエフスキーやトルストイなどの19世紀文学、20世紀初頭のロシア象徴主義、アヴァンギャルド、そしてコスミズムなどのロシア思想に共通する夢でもあった。

近年、チシコフの「僕の月」をはじめとするプロジェクトが、海外で非常に人気を得ているのも（そして、欧米で出版されたロシア現代美術の書籍の表紙を、一度ならずチシコフの「月」が飾っているのも）、チシコフの作品に、「理想的」なロシアのイメージを無意識のうちに重ねているからではないか。

たしかにチシコフは、超越的なもの、実現不可能に思われるものを追い求めてきたロシア・ユートピア主義の系譜に連なっている。しかしそれはすでに、実現不可能なユートピアではない。パン、マカロニ、古い洋服、月で織りなされたチシコフのユートピアは「今ここにあるユートピア」である。

資料1：中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスに寄せて レオニート・チシコフのインタビュー全訳¹²⁾

インタビューアー：渡辺文菜（市原湖畔美術館）
露語和訳：鴻野わか菜

——あなたのプロジェクトは本、映画、インスタレーションなど様々なメディアを用いています。あなたには医師や風刺画家としての経験がありますが、そうした経験はあなたの最近のプロジェクトに影響を与えているのでしょうか？

¹¹⁾ Леонид Тишков, Как стать гениальным художником не имея ни капли таланта. Издание второе, дополненное. С.10.

私はアーティストになる以前、医学を学び、カリカチュアを描いていました。医学が私に教えてくれたのは、生を奇跡として見ることでした。その奇跡は、奇跡の法則を学べば理解することができるのです。カリカチュアが私に教えてくれたのは、世界をふつうとは違った方法で見ること、ありふれたもののなかに不条理と詩情を見いだすことでした。あらゆるものには暗号のようにメタファーが記されています。世界のあらゆるものと一体になりさえすれば、そのメタファーが解き明かされるのです。私はどんなプロジェクトにとりかかる時でも、いつも最初に書物かアルバムを作ります。書物とは物語にほかなりません。そして映画も物語です。私にとっては、インスタレーションでさえ、空間における短編小説なのです。私は魔法の物語の語り手です。

——近年あなたは、「僕の月」プロジェクトに取り組まれていて、いちほらアート×ミックスでも月の作品を発表される予定です。「月」はなにを象徴しているのでしょうか。あなたのプロジェクトにおいて、「月」はどんな意味を持ち、どのような機能をはたしていますか。

月は、もう長年にわたって、私と共にいます。私は、周囲の世界と私自身を変容させる月の光に魅了されつづけています。月は、詩人と夢想家たちの伴侶なのです。月の光は、詩の本質です。私にとって芸術は、そのなかに詩的なものを見いだす時に生まれてくるものです。月との友情は、孤独の体験でもあります。月は、多くの創作者たちを魅惑してきました。そこで私は、詩人や画家たちが出会ったあらゆる月の詳しいカタログを作ることにしたのです。私が最初に興味を持ったのは、ベルギーのシュルレアリスト、ルネ・マグリットの月でした。マグリットの絵画『9月16日』に描かれた、樹木の葉のなかに囚われた月ですね。私は、この幻想的な画家の絵画のなかへ実際に旅してみたいと思い、電球で月を作って、それを木に掛けました。2003年のモスクワの芸術祭でのプロジェクトです。

——いちほらアート×ミックスのための3つの作品（芭蕉の月、デ・キリコの月、ロルカの月）はどのような作品ですか？ あなたの文学的な関心についてもお聞かせ下さい。

そうですね、私は詩人や作家という幻視者たちからインスピレーションを受けています。市原での私の作品は、いつも私と共にあった偉大な作家たちとの対話なのです。そして、月は、時空を超えて私たちを結びつけてくれるものです。

3つの月は、それぞれ異なっています。詩人ロルカは、天才的な絵描きでもありました。彼の描く線はまるで木蔭の緑の芽のように優しく、彼が描いた月は黒く、一方は青く光っていました。ロルカはその月の絵を、詩「夕暮れの二つの月」の原稿に描いたのです。私は長年この絵に魅了されてきました。その神秘性に魅力を感じたのです。ロシア語の月「Luna (луна) ルナ」とスペイン語の月「La Luna ラ・ルナ」が同じ響きであるのも、すばらしいと感じました。ロルカの月は、光の消えた月です。

¹²⁾ 本資料は、中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスのガイドブックのために、2013年12月26日に渡辺文菜氏がチシコフ氏にウェブで行ったインタビューの全訳であり、インタビューアーの許可を得て掲載するものである。

私がつりあげたもう一方の詩人、松尾芭蕉は、俳句のなかで、満月を、切られた直後の木の切り株に喩えて、美しい視覚的なイメージを作りだしました。芭蕉の月は、輝く月です。そして、画家で詩人であるジョルジョ・デ・キリコの月は、甦った月です。

—このプロジェクトでは、あなたの作品は閉校した小学校に展示されます。それについてどう思われますか？

学校は閉校になりましたが、子供たちの声はからっぽの教室のなかで響きつづけています。建物が無人になるのは、いつも悲しいことです。そこにいたのが子供たちだった場合は、なおさらです。私たちは人生の終わりに思いをめぐらせ、悲しい気持ちになってしまうかもしれません。でも、月の永遠の光が、私たちに安らぎを与え、不死への希望を授けてくれるでしょう。

—あなたはこれまでもサイト・スペシフィック・アート（特定の場所に存在するために制作された美術作品）を制作してきました。アートは特定の空間において、どのように存在し、どのように機能しようと思いますか？

芸術は、作品のなかにも、鑑賞者のなかにも存在しません。芸術は、どこか両者のあいだにあるのです。作家の作品が展示される場所は、たんなる台座ではなく、新しい意味の詰まった空間です。芸術作品を鑑賞するためには、あらゆることが重要になります。だからこそ鑑賞者は、作品に出会う前に、学校で学ぶのかもしれませんがね。私にとっては、作品から放たれる光も重要です。そして、私たちが自分自身のなかに見いだす光も大切なのです。

—あなたの作品はユートピア的な側面を備えているといわれます。あなたは世界をどのように感じていますか？あるいは、芸術作品を作るうえで重要なことはなんでしょうか？

アーティストや詩人は、不可能なものや実現できそうもないものを信じることができます。ユートピアを生みだし、天空の城を作り、この世を想像の世界で満たすことができます。

そしてアーティストや詩人は、一つではなくいくつもの道を示し、人々はその道を歩みます。アーティストは社会にしながら、薄い振動板のような役割を担っていて、目に見える世界と、その周囲にある目に見えない世界を結びつけています。アーティスト自身も、いわば目に見えない存在で、取るに足りない存在です。アーティストは、つねに端にいて、無に至るまで自分の存在を消し去り、やがて跡形もなく消えて、自分の作品のなかで溶けていくのです。それは、しかるべき運命であり、ほとんど献身的な活動で、自分の意思とは無関係に、本来的に授けられた運命です。こんなアーティストになれるのは、理想的なものを信じている人だけです。

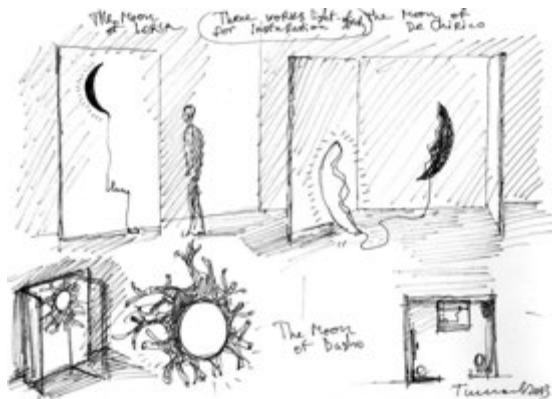
—あなたの作品にはロシア的なアイデンティティがあると思われますか？ ロシア文化というバックグラウンドは、あなたの作品にどのように影響を与えていますか？

ロシア美術は、多くの点で文学的です。ロシア美術は、時には造形的には未完成にとどまっても、多くを語りかけます。まさに未完成であることが、ロシア美術の重要な特徴なのです。そしてロシア文学は、私のインスピレーションの源泉です。ロシアの民話、神話、そしてニコライ・ゴーゴリの幻想小説などですね。ゴーゴリの小説『クリスマス前夜』に出てくる月も、インスタレーションにしたいと思っています。

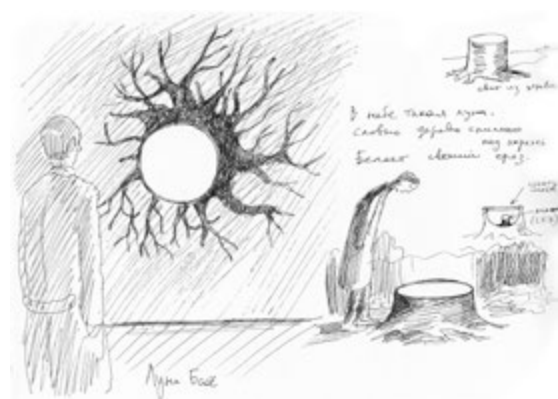
—まだ市原を訪問されていないので、思い描くのは難しいかもしれませんが、市原はどんな場所だと想像されていますか？

私はかつて日本を旅行した際に、東京、京都、そしていくつかの町を訪れました。私は市原には行ったことがありませんが、中心部にはビルがあり、海辺には小さな家々がある町として想像しています。そこにはたくさんの人が住んでいて、幸せな人もいれば、そうでない人もいるでしょう。人々は皆、日々の仕事で忙しく、どこかへ急ぎ、朝早くから電車に乗って出かけ、夜になってアパートの自分の部屋に帰ってきます。そこには孤独な人々もいます。月だけが、彼らの唯一の友人です。そして月は私の友人でもあります。きっと、古い廃校での私たちの祭典は、友人たちをそこに集め、かれらを少しでもより幸せにすることでしょう。私はそう願っています。

資料2：中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスにおける展示のためのエスキース¹³⁾



「いちほらアート×ミックス」展示エスキース



「芭蕉の月」エスキース

¹³⁾ 未公開エスキースも含め、拙論で掲載した図版は、すべてチシコフ氏の提供と承諾による。